

広報

土づくり

11月

最大の思い届くまで

徳島在住の大西多美子さん(61)は、施設で生活した後、障害者が地域で暮らすための活動を行ってきました。今回は多美子さんと、傍で支え続けたお母様にインタビューしました。

【母へのインタビュー…
幼少時〜施設での生活】

■生まれてから
多美子は生まれてすぐ、黄疸がきつくなつたんです。ガーゼの下着が黄色になるくらいで、お医者さんも「こんなきついのは見たことがない」と、布団針みたいな太い注射をしたんです。でも数日後にちよつと注射をしても泣くようになって、お医者さんも喜んでくれたので、治つたものと思つ

ていましたが、その後は這つて物を取りに来ることもせず、首も座らず、太つてはきました。何かをするということがなかなかできなくて、病院に行ったら『脳性麻痺』と診断されました。

■訓練の日々

それから、いい病院に行つたり、信心する場にも連れて行つたり、良いと言われることは全部したんですが一向に効果がなく、生後5か月くらいからずっと訓練に通いました。訓練のために徳



プロフィール

名前: 大西 多美子
在住: 徳島県小松島市
生年: 昭和37年
障害名: 脳性麻痺

島の田舎から小松島市に引越して、納屋のような家を借りて、上の子を親戚に預けて毎日近くの施設に通いました。でも家の世話をしてくれる人は誰もおらず、おしめも昔は布だったので洗って干さなければならず、私は朝昼のご飯も食べられないまま訓練に連れて行き、帰ってきたらすぐに夕飯の支度と、もう大変でした。働き手が主人一人だったので、家賃が月4000円でも溜まって溜まって。辛い思い出ばかりで楽しい思い出は一つもありませんが、親子4人、この子のために頑張っていたんです。

■家を離れて

多美子が小学1年生になったとき、訓練に通っていた施設に預けることになりました。可愛らしい1800円の大きなぬいぐるみを持たせましたが、夜が来たら「元氣しとるかな」と心配で心配で、けれど月に2回しか面会日がない上、多美子はものも言えないし、動くこともできないので、後々いじめられていたと知りました。よっぽど辛かったらしいです。それに男の人が風呂に入れたりするので、その時は「頭

が痛い」と風呂にも入らなかつたそうです。

当時は施設に併設された学園も中学校までしかなかった。なので、「中学校を出たら家に連れて帰ってあげる」という約束をしていましたが、ちょうど卒業と同時に高等部ができたんです。だから「あと3年しんぼうして」と。そしたら多美子は「中学校を卒業したらいいねる(※帰れる)と思う」だったので、嘘言つて「でも自分のためやけん、もう3年しんぼうして」と頼んで、考えていたよりも遅くに学校を卒業しました。

【多美子さんへのインタビュー…在宅生活の始まり】

18歳で実家に戻つた多美子さんは、障害者が地域で暮らすための活動を行う「おむすびの会」の代表に就任。高知市内のグループホームを視察し、規則や門限がなく、介助も依頼があつた

時だけ行う運営スタイルに惹かれ、県内にもそうしたグループホームを建設すべく署名活動を行い、約4000人分の署名を集めるなど精力的に活動し、その模様は徳島新聞に大きく掲載されました。

■多美子さんの語る

これまでの人生 20〜30代の頃、グループホームを作るという目標があり、市や県に掛け合いましたが難しく、実現には至りませんでした。ですが、パソコンで会報誌を作つたり、グループの歌を作成したり、海外旅行に行つたりと活動しました。

40代では、いつか自分の本を出したいと思つていた夢を実現させ、『たーちゃんひとりごと』を出版しました。詩を自分で考え、友人に絵を描いてもらい素敵な作品が出来上がりました。たくさんの方に購入していた

Q & A

Q: 施設では、どのように過ごされてましたか?

A(多美子さん): 平日の日中は施設に併設された学校に通っていました。国語の授業が好きで、文章を考えることの楽しさを教わりました。学校がない土日は自分の部屋にたくさん本を持ち込んでそれを読んで過ごしていました。

泣き虫で、本当によく泣いていましたけど、ただの泣き虫ではなく、ちゃんとした理由があつたんです。今なら「ここが気に入らんのかあ。はよう家族の元に帰りたい」と言えますが、子どもだったので言葉にできず泣いてばかりいました。

だき、作品を読んでもらうことで私の気持ちをわかってもらえることの喜びを感じました。けれどその後、首や肩が痛いなど、あちこち身体の痛みが出てきてパソコンで文字を打つことができなくなり、『おむすびの会』の代表を別の方に受け継いでもらいました。



大西多美子

「多美子さん×母」

■現在の生活

多美子さん：

「在宅生活の初期は訪問介護の事業所がなく、母の介護に頼りきりでした。20代半ばで事業所ができたはじめ、少しずつヘルパーさんが入ってくれるようになり、40代前後によりやく生活様式が安定するようになりましたが、今でも支給時間が126時間と少なく、母がいなくては生活が成り立ちません。」

現在、居宅介護の事業所に毎日数時間入ってもらい、土屋さんからは週3回7時間の夜勤と週1回(日曜日)・6.5時間の日勤に入ってもらっています。その時にヘルパーさんと買い物に行ったり、友人と約束して出掛けたりすることもあります。けれど夜勤のない夜は、足が痛くなり動かしてほしいと思ったり、寝ている母を起こして向きを変えてもらわなければいけません。母に頼りきりではなく、時間を増やして安心した生活を自宅に送れるようにしたいです。」



おむすびの会

母：

「多美子はこの頃、『親が死んだら絶対に施設に行かされる、強制的に行かされる』と言って、その心配ばかりしています。お風呂にもトイレにもリフトを付けて、しっかりと暮らせるようにしたので、『行けへんって頑張ったので、『私がいなくてもいいよ』と多美子は『私が言うたつて聞いてくれん。言葉も分かりにくいし、負けてしまう』と悩んでいます。親亡き後は時間を増やしてもらえるよう、私も市役所と約束はしてきたんですが、その時になってみないと分かりません。本人が頑張るより仕方がないと思っています。」

■母の思い

母：

「親として薄情かもしれないが、親が先に逝くやら、子が先に逝くやら、人の命は分からないものです。だから、もし多美子が先に逝った時には、親が悔いのないようにと思って、小さい時からずっとその気持ちは離さず心に持っていました。あとあと心に残ったから親も辛いので、小さい時から今まで、この子一筋に生きてきたんです。絆だけは誰にも負けないようにと思って育ててきたんですけどね。」

多美子さん：

「絆は誰にも負けないよ。」

母：

「私も自分の人生といったものがないまま年を重ねてきたので、今はもつと自分の人生を楽しもうと思っています。ヘルパーさんがいる時に安心してモーニングやカラオケに行ったり、夕方にコーヒーを飲みに行ったり。日曜日はちよつと離れたところに行きませんが、それが唯一の“時間の長い”楽しみ。それがなかったら夜中も昼も縛られて、ものすごくストレスが溜まると思います。ど

れだけ一途にしようと思っても、本心はやっぱりそうです。家族も息抜きは大切だし、多美子も『かあちゃんくくつとつたら、せこいんや(＊縛りつけていたら自分がつらい)』って、『そやけん、好きなことし。どこでも行き』って言うてくれるんです。」

■さいごに、多美子さんからのメッセージ

重度の障害を持つ人が、年がいけば早く死にたいと思うのではなく、思いっきり欲張りになって一度きりの人生を最後まで楽しかったと思えるような社会であってほしい。そのためには、自分に合ったヘルパーさんや看護師さんを探していくことが必要だと思います。

私の人生にそつと寄り添い、私の出来ないところをカバーしてほしい。これからも私は生きます。そして、私の人生最後の日は、私のポリシーでもある、お世話になった人たち、そして母に「ありがとう」の一言を残して、人生の終止符を打ちたいです。」

広報・土づくりへの
ご意見・ご感想

土屋グループの各種取組みについてのご意見や、当社介護サービスにおいて虐待や不当な身体拘束が疑われる場合がありますらご一報ください。

ご意見・お問い合わせ窓口
client@care-tsuchiya.com

発行元:株式会社土屋
住所:岡山県井原市井原町192番地2久安
セントラルビル2階

